

日本人のみた外国 衆生を喜ばす行を追って -- タイ・バンコク (カルチャー・ショック)

著者	後閑 利隆
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	147
ページ	52-52
発行年	2007-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047048



(筆者撮影)

衆生を喜ばす行を追って——タイ・バンコク——

後閑利隆

南伝仏教が盛んなタイでは、托鉢を「衆生（僧侶でない人）を喜ばす行」と言う。

日本のような北伝仏教で、その言い方があるか分からない。一方、日本では、信者が金品を差し出すことを喜捨とも言う。

喜捨は、商業行為でなく、信者の好意から金品が差し出されたという意味だろう。

逆に、「衆生を喜ばす行」という言葉からは、喜捨という言葉からは感じられない営業努力や僧侶が与える信仰サービスの対価として金品を信者から受け取るという発想が感じられる。

日本で托鉢をする僧侶は少数派だ。タイでは日本のような檀家制度はなく、「衆生を喜ばす行」は毎朝見かける。日本では、托鉢で生活ができるとは思えないので、タイではどのように衆生を喜ばす努力をしているか知りたかった。そこで、筆者はバンコクで、托鉢中のある僧侶の後を歩いた。夜が明けだすと、寺から一人か二人組みの僧侶が次々と托鉢に出かけた。お寺の周りに外灯はなく、セブンイレブンの明かりが目立っていた。戒律では、自然光で手相が分からない時間の飲食を禁じている。そのため、僧侶は空腹のはずだ。

僧侶は剃髪し、黄土色の袈裟を着て、素足で歩いていた。バンコクではコンクリー

トの舗装が多いので、素足でも歩きやすく見えた。しかし、新米の僧侶は足の裏を切ると聞いた。手にはバレーボールの大きさの容器を持っていた。僧侶のお供として、僧侶一人につき男子児童が一人いた。お供は普段着で、袋を肩から提げていた。袋には、容器が四つくらいあった。お坊さんは先頭を歩き、その後をお供が歩いた。筆者はお供の後を歩いた。

まず、セブンイレブンの店員や露店の車を引いていた人が喜捨をした。次に、ある家に僧侶が招かれた。家から出た僧侶は、お供の袋の中にある空の容器と喜捨を受け取った。お供の袋の中にある空の容器と喜捨を受け取った。お供の袋の中にある空の容器と喜捨を受け取った。

その後、路地裏を歩き続けると、人も車も多い活気のある通りに出た。その通りから路地へ入ると市場があった。通りからちようど路地に入ったところで、先着の僧侶が五、六人立っていた。多くの衆生を喜ばすのに、好都合な場所なのだろう。路地の片側に僧侶が立ち、もう一方に露店が並んでいた。

露店では喜捨用の食べ物が写真のように皿の上に乗せられて売られていた。豪華な皿の上には、ご飯、ジュース、おかず、ビスケット、汁物、蓮の花の造花があった。食べ物はビニール袋に詰めてあり、袋の口

を輪ゴムで汁が外に漏れないように固く塞いであった。品数は、露店により異なり、写真のように品数の少ない皿もあった。品数により、価格は若干異なった。高価な皿を売る露店が僧侶の正面にあるせいか、高価な皿がよく売れていた。

バスを待つ人も、喜捨をした。信者が僧侶の前に立つと、僧侶は容器の蓋を空け、信者が皿の上の食べ物を容器に入れ終わると、僧侶は容器に蓋をした。信者は造花をその蓋の上に置き、僧侶の前でしゃがみ、合掌をすると、僧侶は祈祷を始めた。

筆者が追った僧侶とお供の間で何度か容器の受け渡しがあった。僧侶とお供で食べられる以上の喜捨を彼らは集めたように見えた。筆者は一皿購入したが、衆人（僧と露店のおじさん）環視の中で味を確認できなかった。

できるだけ多くの衆生を喜ばす仕組みとして、喜捨用の皿を売る露店が市場にあることと露店の前にお坊さんが集まっていることに驚いた。露店のおかげで、バンコクでは托鉢をすれば、生活ができるのだと思う。ただし、多くの食べ物を運ぶために、お供を見つけないといけない。

（ごかん としたか／アジア経済研究所 新領域研究センター）